

フォト・エスノグラフィ

「南あわじ市湊地区の歴史―道と港の変遷をめぐって―」

西村 裕貴

はじめに

明治時代初めより、瓦の積出港として栄えていた湊地区。しかし、現在中心街を歩いてみると、人通りはほとんどなく、いわゆるシャッター街となっている。要因として考えられるのは、住民の高齢化による購買意欲の低下や、町自体の機能が崩壊していること。また、モータリゼーションによる、住民の行動範囲の広域化や、港の衰退など複数の事案を考えることができる。そこで本写真集では、これらのことを通じて、実際どのくらい2011年現在の湊地区の景観に現れているのかを示していきたいと思う。



写真1 南あわじし商工会館の外観

1976年（昭和51）西淡町商工会館として完成する。訪問時は閉庁していたが、入り口には瓦のプレートを配置し、鳴門大橋とうず潮を描いている。またこの会館は、西淡町の商店主達が会合を行っている場所でもある。



写真2 港地区の商店街を撮影

これは2011年8月に撮影した。湊地区の商店街の写真である。左手の洋品店はシャッターが下り、看板も外れている。商店街を進むとこのようなお店が目立ち、道には人通りがない。



写真 3 1924 (大正 14) 年に撮影された御原橋の写真 写真 4 2011 年に撮影した御原橋
 西淡町のあゆみによると、旧湊村と西淡町は、叶堂 (かのど) の渡しで結ばれており、
 湊地区からほかの地区に行くには船を利用しなければならなかったが、1898 (明治 30) 年

に県営で御原橋がかけられてからは交通の便がよくなった。



写真 5 2011年の湊港（旧港）の写真

湊町は、漁港の役割とともに瓦の積出港としても栄え、昭和初期には西淡町域でも最大の規模を誇った港だった。この時、旧港には、小規模の船が 30 隻ほど係留されていた。周辺には、水産加工業者や漁協組合なども立地している。



写真 6 湊地区に立地する町営住宅

湊地区は、港としての規模を拡大するに伴い、住宅が不足しつつあった。そこで西淡町では 1963 (昭和 38) 年より町営住宅の建設を始めた。この写真では川沿いに位置しているが、ここは新港が造成される前の海岸線付近に作られた。そのため居住した (している) 人は、湊地区の中心部に住んでいた人よりも経済的に弱者であったのではないかと考えられる。

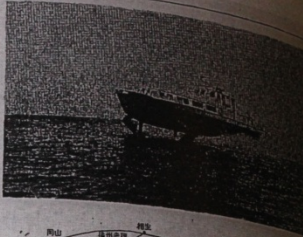
ま方の歩み

神戸へ70分 鳴門へ20分

大阪・神戸がぐっと近くなりました

3月1日から 阪急水中翼船湊に寄港

このたび阪急内海汽船鳴門航路が西浜町湊港に寄港することになりました。阪急内海汽船は時速75キロのスピードでつばしる海の超特急です。何卒ご乗降下さいませよう願ひ申し上げます。



◎ 時刻表 4月1日～6月31日 9月1日～9月31日

| 上 | | 下 | | 上 | | 下 | |
|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|
| 鳴門発 | 神戸発 | 湊発 | 神戸着 | 鳴門発 | 神戸発 | 湊発 | 神戸着 |
| 8.00 | 17.00 | 8.20 | 18.10 | 8.20 | 15.20 | 8.40 | 16.30 |
| 8.25 | 18.15 | 8.45 | 16.35 | 8.45 | 16.35 | 9.55 | 16.55 |
| 9.35 | 18.35 | | | | | | |

◎ 運賃 (大人片道運賃、小児は4才～12才)
 湊～神戸 1,120円 (小入560円) 湊～鳴門 300円 (小入150円)

◎ お問い合わせ、お申込みは
 湊 船 船 組 合 區(湊) 23番
 阪急汽船神戸中津屋営業所 區神戸③ 3100番
 鳴門営業所 區鳴門④ 2485番



瀬戸内海の超特急
阪急内海汽船

▲昭和42年～昭和50年まで運航していた水中翼船の時刻表



写真 7 阪急水中翼船の広告 写真 8 水中翼船の船着場あと

写真 9 旧船着場付近の旅館跡

1967（昭和 43）年 3 月神戸～湊間を結ぶ水中翼船が開通し、都市部との物の交流や人の交

流が増えた。しかし、10年間で水中翼船は営業を終了する。現在船着場付近には、営業は行われていないが料亭旅館の建物が残っている。



写真 10 スナック MINATO

すなックミナトの建物が、水中翼船の船着き場付近に残されていた。現在は営業が行われていないようだ。このような建物が残っていることから、湊地区は昭和中頃まで、盛り場としての役割を持っていたのではないかと推察できる。



写真 11 湊港西部臨海用地造成事業記念の石碑

湊港の規模が足りなくなってきたため、兵庫県は昭和 45 年度湊港外港計画を立て、湊港を淡路西浦第一の拠点流通港湾として整備を進めてきた。

その事業で湊港湾区域内の公有水面約七万七〇〇〇平方メートル（二万三四〇〇坪）を埋め立て、岸壁の総延長が四七〇メートル、物揚げ場の岸壁総延長が二五〇メートルとなり、一〇〇〇トンの貨物船が横付けできることになった。

湊港は湊港の外港整備事業と平行して、西淡町は市街地再開発を促進するため、湊港西部海面を埋め立て、用地を造成する計画案を昭和 49 年 3 月に策定した。

また石油類を荷揚げする危険物専用栈橋を建設した。港湾（内部）周辺にあった 26 基の石油タンクが造成地に移転し、湊港周辺の生活環境は著しく改善整備された。埋立地は字新島と名づけられた。





写真 11 写真 12 売り物件の看板 写真 13 建物全体をつたが覆う空家

埋立地を作り、工場を誘致したり宅地造成事業などを進めるものの、人口の減少が進むとともに工場や商店の撤退が相次ぎ、空き地や空家が目立つようになった。また、写真 11 や写真 12 のような看板は湊地区でいくつか見られた。





写真 13 SEAPA（シーパ）写真 14 マルナカ

写真 15 シーパの店内の様子

1995（平成 7）年 3 月に完成した SEAPA は湊地区の中心部から約 1.5 km の距離にあるショッピングモールで、湊地区の商店主も出店していた。しかし、最初に出店をしていた店主の多くはテナントから撤退している。またこれらの店は、大きな駐車場を備えていて、車で買い物に来る買い物客にとって利便性が高い。

またその後マルナカも出店している。



写真 16 明石海峡大橋

1998（平成 10）年に明石海峡大橋が開通し、本州と四国、淡路島が橋でつながった。これまで、船中心で行われていた物流形態に変化が起こり、四国や本州資本の企業進出が増えた。



まとめ

当時は瓦の積み出し港として栄えた湊地区であったが、港の増設や輸送形態の変化（明石海峡大橋の開通など）により地区自体の性格が変化し、現在は以前の賑わいを失っているように見える。湊地区の住民は高齢化が進んでおり、今後はこの傾向にさらに拍車がかかるのではないだろうか。